

# 埼玉育ちのグローバル人

## 卓球を通して見る中国と日本

### ～二つの故郷が私にくれた宝物

#### 第1回 「選手として」

#### 卓球プロコーチ

#### 鄭 慧萍 (テイ ケイヒョウ)



埼玉県マスコット「コバトン」

初めまして。鄭慧萍と申します。

ご依頼をいただいた時、私で大丈夫かなと思ったのですが、私の経験がこれから世界に出て羽ばたきたい方にとって少しでもお役に立つならばと思い執筆させていただきました。

早速ですが、まずは私が中国で卓球を始めてから、日本に来るまでの経緯についてお話しできればと思います。

私は埼玉県友好都市である中国山西省の出身です。(中国の省は日本でいう県に相当します) 私が卓球を始めたのは小学一年生の時のことでした。私は三人兄弟で兄が二人いて、最初は二人の兄が卓球を練習していました。教えていたのは卓球が好きな父だったのですが、父はプロ選手ではなくただの愛好者ですので、経験もあまりなく、本を読んでみようみまねで教えていたのです。実は私が初めて卓球に関わったのはプレイヤーとしてではなく兄のボール拾いとしてでした。私は小さい時、よく風邪をひくほうで、体があまり丈夫ではなかったため練習には参加できず、ずっとボール拾いをしていました。

その内、兄たちが練習している合間にちょっと遊びで参加するようになり、体を鍛えるためにもいい運動になると思った両親の勧めもあったため、私も兄と一緒に練習に参加するようになりました。その時私の練習を見ていた父は「そのうち、兄達よりもうまくなるのではないか」と感じていたよう

です。(笑) そうやって家族で練習して、少しずつ上達していくうちに本格的に卓球をやってみたいという思いが私の中で芽生えてきたのです。

そんなある日、父は本を開いて当時の中国代表チームと世界チャンピオンの話を聞かせてくれました。そして本を閉じて「将来代表チームに入れるように頑張りましょうね」と言いました。父がその時どのような思いでその一言を言ったのかは聞いてみないとわかりませんが、今思えばあの些細な一言が私の中の「プロを目指したい」という気持ちを後押ししていたのです。



ナショナルチームの寮で

私は小学校に入学したのは「少年宮」というところで本格的に卓球を学び始めました。少年宮で小学校四年間を過ごした後、市の代表になり、中学進

学する前に、山西省チームの代表になって、省のスポーツ学校に入学しました。勉強に励む傍ら、本格的に省の代表選手として全国大会に出場する日々を過ごしたあと、高校一年生の時に念願の中国代表チームに加入することが決まりました。

こうして、兄のボール拾いから十年、念願の中国代表チームに加入することができました。

今回は代表選手として学んだことを一つお伝えしようと思います。それは『自分より高いレベルの人が集まる環境に身を置くことが成長に繋がる』ということなのです。

中国代表チームは、基本的にメンバーは全員合宿所に入って、勉強をしながら、寝食をともにし、いつも一緒に練習しています。卓球という競技は、相手との一騎打ちです。例えば、自分が強いボールを一本打っただけで、もう相手が返せなかったら、練習になりませんよね。そうなると、試合の時に相手がレベルの高い選手であった場合、そのボールを返してきた時に対処ができなくなってしまいます。逆に、自分がどんなに強いボールを打ったとしても、相手が全部返してくれば、自分もまた次の返球の練習ができる。質の高いボールのやりとりの回数が長ければ長いほど、実力が高まります。そうすることで、試合の時に自分の練習相手と同じくらいのレベルの相手なら、いつも練習してきたように対応すれば勝てる可能性が大きいです。しかし逆に、自分より弱い人がいる環境で練習をしていると練習では確かに自分が「強い」という実感を得られるかもしれませんが、実際の試合で相手がいつもの練習相手より「強い」と勝つのは難しくなるでしょう。だから、中国の代表選手は自分と同じレベルか自分よりもっとうまい選手と常に練習をすることで、技とメンタルを磨いています。常に自分より強い人と切磋琢磨することは簡単なことではありません。時には「なんで自分はこんなこともできないんだろう」と落ち込むことももちろんあります。しかし、自分が常に上を目指さなくてはいけない環境で必死に周りに食らいついていくこと

は、きっと自分を次のステージへと導いてくれます。チャンスがあれば常に積極的に信念を持って色々な面で自分よりレベルの高い人が集まる環境を求めることの大事さを中国代表チームの経験を通して学びました。

小さい時、父の教えから卓球を始めて、一つ一つ階段を登って、国の代表チームまで行った経験を通じて学んだことこそが、卓球を通して中国が自分に与えてくれた大事な宝物です。そしてこの宝物は後に第二の故郷、日本に渡った時も私に力を貸してくれました。